

闇の中に輝く光② 「ロゴスを発見する」ヨハネ 1:1-8,14-15

前回、わたしたちは「光は暗闇の中で輝いている」(1:5)という希望のメッセージと共に、イエス・キリストが創造主であり、すべての時間は主のものであることを分かち合いました。引き続きヨハネによる福音書 1 章からコロナ危機を生き抜くための希望のメッセージを受けたいと思います。

ヨハネ 1 章は、一つ一つの言葉の意味が深く、その構成も複雑で、繰り返し読んでも分かりにくい箇所ですが、他の福音書にはない大切なメッセージが記されています。わたしたちがこの 1 章への理解を深めるために注目すべき一つのポイントはヨハネがイエスさまを「言(ロゴス)」と表現していることです。今日はどうしてそのような表現を用いたのかを共に考えつつ、その中で示されるメッセージを受けたいと思います。

ヨハネが経験したイエスさま

14 節を見てみますと、「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。」とあります。ヨハネはイエスさまと共に過ごした約 3 年間、自分が体験したイエスさまを 2 つにまとめています。一つは、イエスさまが人々の間に宿られたということです。ヨハネは「わたしと父は一つである」(10:30)と言われたイエスさまがいつも弟子たちと共におられる姿を通して「我々と共におられる神」すなわち、インマヌエルの神の姿を見たのです。もう一つは、イエスさまがいつも恵みと真理とに満ちておられたことです。その輝く姿を見てヨハネは神の独り子の栄光だと告白したのです。このような豊かな恵みを経験したヨハネは多くの人々がイエスさまを信じることを願いつつこの福音書を書きました。「これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。」(20:31)

ここでわたしたちはヨハネが福音書を書いた時、キリスト教会がおかれた状況について知る必要があります。歴史によると、反乱によって紀元後 70 年にエルサレム神殿は破壊され、エルサレム教会のリーダーは殺され、教会は散らされてしまいました。多くの学者たちはその後、エフェソでヨハネが福音書を書いたと考えています。キリストの福音が受け入れられるところか、むしろ教会が厳しく迫害される中、ヨハネは自分が経験したイエスさまを周りの人々に伝えようとしたのです。また、ローマ時代の人々は、神とは人間の世界には関与しない存在で、気まぐれな性格だと理解していたので、さらにイエスさまを伝えることが困難だったのです。そんな中、ヨハネは彼らがイエスさまを受け入れることができるように「言(ロゴス)」の概念を用いました。

ロゴスの発見

この概念は聖書の他の箇所には見られないもので、後に神学と哲学に大きな影響を与え、多くの人々をイエスさまに導くために用いられました。では、どのようにしてヨハネは「言(ロゴス)」の概念を取り入れたのでしょうか。今までその理由を説明するために多くの研究がなされてきました。いくつか例をあげてみますと、①旧約聖書によると神は言

葉によって天地を造られ、言葉によってイスラエルの民を救ってくださったので、イエスさまがその主の言葉としてこの世に来られたことを表すためではないか、②神の代理者として描かれた旧約の知恵をロゴスで表現したのではないか、③ギリシャ哲学で聖なる理性や秩序などを意味するロゴスの概念から影響を受けたのではないか、④ヘブライ語の聖書を分かりやすくアラム語で解釈したタルグムという資料には神を言葉で表現する機会が多いのでその影響ではないかなど、たくさんの学説があります。どんな説もヨハネがロゴスの概念を使った理由を完全に説明できません。また、どんな説もまったく関係ないとは言えません。学説は歴史的な資料に基づいて研究されたものだからです。いろんなことを調べながら至った結論は、今までユダヤ人としての信仰と、イエスさまへの深い経験の上に、当時多くの人々に理解されていたギリシャ哲学のロゴスの概念からキリストを発見したということです。聖霊の導きの中で気づきを与えられ、聖霊の導きの中で独自の概念を発展させ、世の初めから神と共におられた創造主なるイエス・キリスト、この地に来られて新しい創造を始められたイエス・キリスト、神と共にあった神、すなわち三位一体の神であるイエス・キリストを当時の人々に分かりやすく伝える方法を見つけたのです。喜びに満たされたヨハネの姿が想像できます。

皆さん、いくら暗闇のような時代であってもキリスト者のただ中に宿っておられるキリストによってわたしたちはその時代の光となるキリストを発見することができます。光は闇の中に輝いているからです。その中でわたしたちはキリストをさらに深く経験し、闇に打ち勝つ力と希望を与えられ、前進できるのです。2千年前だけでなく今もこれからも。

ニューギニア島の西側イリアン・ジャヤの奥地には原始的な暮らしをしているサウイ族の人々が住んでいました。カナダ出身のドン・リチャードソン宣教師はそこで宣教活動を始め、彼らに聖書のお話を聞かせました。すると、彼らはイエスさまを裏切ったユダを一番尊敬しました。彼らにとって一番の美德は人を裏切ることだったからです。裏切りから争いが絶えない状況の中にいた彼らへの福音宣教は困難でした。ところが、サウイ族は村と村の間で戦うときに、その争いを終わらせるための一つの風習がありました。村のリーダーの子どもを相手の村に渡すことです。すると、その子が生きている間、両村は戦わないのです。リチャードソン宣教師はその風習から福音宣教の突破口を発見し、その子どもを「和解の子」と呼び、イエスさまがそのようなお方であることを伝えて、たくさんの実を結ぶことができました。

ロゴスを発見した者、ヨハネ

ヨハネ 1 章にはバプテスマのヨハネが荒野で御言葉を語る人ではなく、ヨルダン川でバプテスマを受ける人でもなく、光を受け入れ、その光について証しする人として登場しています。闇の中で光を見つけ、光を受け入れた彼は、主の証し人として遣わされました。

このコロナ危機という闇の中でも主はわたしたちの間に宿っておられ、わたしたちにこの時代に必要なキリストの光を照らしてください。わたしたちがその光を見つけるなら、改めて主に出会い、そこから新たな力と希望を与えられ、力強く歩むことができるのです。この世に主の光を輝かせることができるのです。